

## 陳述書

2013年5月22日

原告 松浦雅代

私は和歌山市に生まれ育ち、現在も住んでいます。

1979年アメリカのスリーマイル島の原発事故で、和歌山県が原発候補地だという事を知り、原子力の事を学び初めました。スリーマイル島の事故は炉心溶融という重大事故でした。事故から3日後、州知事が半径5マイル(約8km)内の妊婦や幼児の避難を決定しました。この時、初めて事故が起これば大変な事になる事を知りました。一年後まだ原子炉の中がどのようになっているか分からないのに日本の国は安全宣言を出しました。

スリーマイル事故の7年後にチェルノブイリの事故が起きました。核暴走事故でした。ゴルバチョフ書記長の「我々は核戦争のあとを経験してしまった」と述べている映像が映し出され、私は衝撃を受けました。チェルノブイリ原発から30kmが強制避難地域になりました。

詳細が分からないうちに、国は原子炉の形が違うから日本の原発は安全だと直ぐさま安全宣言を出しました。和歌山では推進の動きが活発になりました。チェルノブイリから8000km離れた日本にも放射能が飛んできました。地球規模の放射能汚染でした。私たちは環境に放射性物質がばらまかれるとどうする事も出来ないし、人間の手に負えない事を知ることになりました。

ドイツの大学では生殖器が被ばくするから芝生に座らないようにと学長が注意。フィンランドの女性1000人が子どもを産まないデモを繰り広げました。ヨーロッパからは原発計画の見直しの情報が次々入ってきました。しかし日本では国と電力会社は原発は安全だと言い続けました。

この時、私は何としても和歌山の原発建設を止めたいと思いました。私一人ではありませんでした。同じ思いのお母さんたちがたくさんいました。

和歌山県の原発立地計画は1967年から4町5か所になりました。しかし現地の人たちは原発の危険性を早くから見抜いていました。「青い空・青い海・青い山を子どもたちに残そう」と故郷を守るために反対を繰り広げました。1968年日高郡の14漁協は県知事への陳情で「県当局は如何に如何様にこの危険物を誘致に、誘導するか。世界最大なる危険物の取扱により人類の抹殺、且つ沿岸漁民を餓死に導くがごときこと、これが施策か(略)かかる世界人類最大の危険物の誘致に対して漁民の真意をよく御諒察頂き、………」とこれは今から45年前のものです。日置川町では1988年、今から25年前「町を荒廃させる原発より過疎の方を選びたい。それが子孫に残してやれる唯一の道」と言った町長候補が勝ちました。和歌山の反対してきた人たちが何を守ってきたのかを知らしめるものです。現在、和歌山県には原発は1基もありません。

2011年3月11日、現実に日本でレベル7の原発事故が起きてしまいました。メルトダウンが起きていたにも関わらず、直ぐに国民に知らせませんでした。ただ一つの予防策ヨウ素剤をほとんどの子どもたちに飲ませませんでした。放射性ヨウ素を子どもたちは体内に取り込んでしまいました。現在日本の法律の基準では当然放射性管理区域になるべきところに子どもが住んでいます。この現実を私たちは直視しなければなりません。

好むと好まざるに関わらず、私たち関西の人間も福島で被ばくしてしまいました。これからも被ばくは続きます。放射性物質は見えない上に、においも色もついていません、痛くもかゆくもありません。人間の五感には感じる事が出来ません。が環境中にばらまかれた放射能に被ばくし必ず影響を受けます。特に子どもたちについては大人の何倍もの影響があります。半減期が約30年のセシウムは、子どもたちのこれからの人生で影響は避けられません。

幼い子供を抱えて福島や関東から和歌山にも避難してきたおかあさんたちは、子どもに被ばくさせてしまった親としての苦しさや家族離れ離れによる子どもたちの不安定さに苦しんでいました。

「こわくて次の子どもが産めない」「安心して子どもを育てたい」というお母さんの声は切実です。なんとしても安心して子どもを生み育てられる環境を未来の子どもたちに引き継がねばなりません。まず地殻変動の激しい日本で、原発を稼働させない事。環境汚染と「核のごみ」をこれ以上増やさない事。いま唯一動いている大飯3・4号を未来の子どもたちのために、速やかに停止させて下さる事を求めます。